

発表題目：「家」で暮らす高齢者と専門家とのかかわりあい
～ホームホスピスにおける「持てる力」の探求～

所属： 大阪大学 大学院 人間科学研究科

氏名： 吉田 佳右

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本発表は、老いや病いおよび障害のある高齢者の主体性に関わる問題を、「家」における専門家との関わりあいの事例に着目し、実践としてのケアという観点から考察することを目的とする。

老いてから死ぬまでいかに生きるのかというテーマは、医療だけでなく、政治や経済および倫理など幅広い領域に関わる問題として強い社会的関心を引き起こしてきた。そして近年、近代・西歐的で個人主義的な社会において、理想的な生き方を表す指標として重視されているのが「自分らしさ」である。だが、老いや病いおよび障害の進行に伴い、やがては自律した生活を自己のみでは実現し得ない時期が訪れる。また、「自己」とは社会的な存在であるため、必然的に他者の観点から見た「その人らしさ」という側面を含み込んでいる。それゆえ、当事者のみでの力による「自分らしい」生の追求には限界があり、個人が最期まで安心して生きる道を拓くことには繋がらない。だとすれば、他者と場所や空間を共有しながら「自分らしく」生きる関係性の築き方や環境について探究することが必要となる。これは、個人間の差異を前提とした上で、いかに当事者がその差異を保ったまま集団の中で「自分らしく」生きることを他者が支援しうるのか、という問題と地続きである。

以上の問題意識に対して、本発表では、近年の人類学的研究において自己と他者との「関係性」という観点から探究されている「ケア」の領域に注目する。従来のケアの関係性をめぐる研究は、主に治療の場としての「施設」を対象とし、権力という観点から分析してきた。これに対して、当事者と周囲の人々におけるヴァルネラブルな経験を介してつながる関係性を捉えた研究がある。後者に関わる一連の研究の主題とは、当事者がモノではなく人間として主体性を行使しうる関係性や環境のあり方を探究することにある。だが、主客をめぐる議論で前提となる主体性を当事者が行使しうる専門家との関係性のあり方については解明されていない。

そこで本発表では、老いや病いおよび障害をもつ人びとの「自分らしさ」が現れやすい生活の場としての「家」をフィールドとする。その上で、家で暮らす住人とケアに従事する専門家との関係性を「実践」という観点から見つめ直す。そして、こうしたアプローチを通じて、身体能力の衰退や障害という多様な制約の中で、人びとが「その人らしく」生きられる可能性を探究する専門家のケアについて考察する。今回取り上げるホームホスピスは、複数の人びとが共同で生活し、24 時間常駐する専門家によってケアが行われる中で死を迎える「第二の家」と呼ばれる。そこで暮らす住人の「持てる力」の探究という専門家の実践は、多様な制約のなかに彼／彼女の「能動性」[モル 2020]を積極的に認め、その生の可能性を拡大する方法である。このように、本発表では両者の差異を前提とした上で、部分的に同質な他者と向き合う専門家の態度を主題化する。そして、上述した実践がケアの文脈における他者とのかかわりあうための一つの技法であることを提示したい。

《参考文献》アネマリー・モル、2020、『ケアのロジック-選択は患者のためになるか』水声社。